



第3回

麒麟か反逆者か「明智光秀」

講談師 一龍齋貞花

2月半ば、群馬県沼田市の郷土資料

館で、明智光秀が従兄弟の領主土岐定政に贈った「血吸銘の槍」を覗てきました。長い柄が無く、槍の穂先だけで刃も短く、槍は長い柄があることで凄さを感じるもの。ことに織田信長は、三間半、6m40cmという長槍を使用。槍の名手と言われた服部半蔵の使用した槍、長さ4m30cm、重さ10kg、現存しているこの槍、一部損壊したとはいえ、持ち上げるだけで大変でした。

この沼田で130人程の会、講演の折、光秀の槍をご覧になった人はほとんど、わずか10人程。地元がこんな状態では折角の宝も持ち腐れ。市の関係者はきちんと報せていますというものの、伝わっていない。以前本誌に「伝えるのではなく、伝わるのが大切」という記事があったので、講演の中で「伝わらなければなんにもなりません」

と使わせていただきました。

大河ドラマの中で、医師手伝いの娘が光秀に心を寄せたり、細川藤孝（後に幽斎）と対等に描かれているが、藤孝は足利十一代將軍義晴の血を受けた正真正銘の貴族の出で、二条家歌道の正統を受け継ぎ、和歌だけでなく儀式の礼儀作法、故実にも通じた当代一の教養人。光秀の生涯に於いてこの藤孝との出会いこそ総てであったともいわれる程で、藤孝によって義昭を知り、藤孝との交際を通しておのれの教養知識に一層磨きをかけることが出来たともいわれます。信長は、儀式作法に詳しく朝廷の事情にも通じた光秀を召し抱えたことにより、こまごまとした堅苦しい雑事にとらわれることなく、本業の軍事に専念することが出来、実に重宝な存在でした。

光秀も、織田家に仕官したことで暮らしは安定。都の治安を守り、信長が將軍を盛り立て国内統一を進めていけば、光秀が理想とする將軍を頂点とした秩序ある武家社会が出来る。その基礎づくりを果たしているのは自分だとエリート意識が高まります。

生来の秩序好み

信長の家来となって軍議の時、信長、羽柴秀吉、柴田勝家、前田利家等いずれも現在の名古屋市内の出身、皆名古屋弁です。

「わしは、こうやったらええと思うけど、どうだろうなも」

「わや言やあすな、そんなこといかながや」

「うみやあこといくと思うけど」「たわけたこと言やあすな」

こてこての名古屋弁、会議に連なっている光秀が、

「恐れながら、それがしの思うところを申し述べさせて頂こうと存じます。これこれしかじかでは如何でございますでしょうか」

「ああつは、利口だで頭がええでいかなわ」

「いかん、いかん」

美濃出身ではあるが、室町文化を身につけているから京都弁。こんな田舎者に天下を任せてはいけないと思っただかも。

また天皇の定めた暦は、天正十一年一月が閏月。

信長の尾張では、天正十年十二月を閏月とする暦が使われ、地方によってまちまちで、信長は朝廷の京暦に対し尾張で使用している三島暦に統一しようとした。



「朝廷をないがしろにしようとするのはおかしい」

無謀なことを続ける信長に、生真面目で伝統と義を重んじる光秀は面白くなかったのではないか。これは本能寺の変わらぬかひと月前のことです。

思想も道理にかなったものでなければいけないという考え。

徳川家康接待役の時、光秀が準備した魚が夏の暑さで腐ってしまい、いやな臭いが城内に充満したため、信長が怒って接待役を解任。これが謀反の引き金とよく言われているが、本当は中国戦線の状況が変わったためで、五月十七日、備中高松城を水攻めにしていた秀吉から、

「吉川元春、小早川隆景が、高松城救援に参ります。毛利の主力部隊、この敵は上様でなければ倒せません。ご出馬のほどお願い申し上げます」と、要請があり、それに先駆け光秀に出陣を命じます。

実際には水攻めにしていて、毛利の主力部隊と言えど手が出せず、高松城は落とせるのだが、大敵毛利に勝ったのでは、疑い深い信長に「こ奴、これほどの力があるのかと思われては大変」と、主君の性格を読んで「来てく

ださい」。信長が来なくても勝てるのだが、

「流石上様」と立てよう、花を持たせようと考えたのではないか。人の性格を読むことのうまい秀吉ならではの「読み」ではないかと私は思っています。読みの大切さ、取引先だけでなく上司の性格を把握することが、保身であり。結果的に上役に花を持たせたことで、秀吉に天下が転がり込んでくるのです。

出陣を命ぜられた光秀は、居城の坂本城に入り出陣の支度。

すると、「出雲、石見の二か国を与える。代わりに近江・丹波を召し上げる」これでは自分の領土がなくなってしまう。これも裏切りの要因とされていますが、この当時戦った地域を勝つたら恩賞とする約束手形はあったし、それよりも、自分より格下の秀吉の指揮下に入れと言う屈辱が大きかったのではないか。

才覚に富み、人の心をつかむことに長けているとはいえ、所詮は草履取りからのし上がり、ただ主人信長のために一心に働いているだけで天下の理想がない。いずれ我が膝元に臣下の礼をとらせられるだろうと考えていた。

その秀吉の指揮下というのはプライドの高い光秀には、面白くなかったのではないでしょう。

和歌、連歌、お茶などにも優れ、その高い知性を証明するものとして、

一年前の天正九年に「明智光秀家中軍法」と呼ばれる十八か条の軍の規律を書いたもので、とりたてて新しい内容が盛り込まれているわけではないが、光秀のオリジナリティに間違いなく、自筆のものが今も残っています。その中に、「浪人の身から拾ってもらった」と、感謝の気持ちを書いており、信長の粗暴なパワハラにも、理性をもって自分を抑え、怨みを持っていない。一心に先頭に立って働いてきた。だがそうこうする内、休息せよと休みを与えられたり、秀吉の指揮に従えと命令され、

「おれもそろそろ無用になったのではないか。先輩の林通勝、佐久間信盛のように切り捨てられるのではなからうか」

そんな不安がプライドを傷つけられたのかもしれない。

しかしこれも憶測であって、出世させてくれた信長に弓を引く本当の理由は何だったか。四百四十年たった今も

わかっていません。

上杉家の記録に、「覚上公御書集」という上杉景勝の記録や、書状を江戸時代にまとめたものがあり、天正十年六月二日の日付で、

「二昨日明智のところより、越中魚津まで使者をよこした」とあり、一日とは五月三十一日。本能寺の変の二日前。信長の敵上杉に使者を送り、都を追われた義昭のために立ち上がってほしいと頼んだのではないか。使者が上杉のもとに到着するにはどんなに急いでも三日や四日、場合によっては七日近くかかることも考えられ、義昭を担ぎ上げ再び室町の將軍時代に戻そうと諸大名に呼びかけていたのではということになり、本能寺の変は突発的なものでなく、計画性の高い事件だったとも考えられるという歴史学者もいます。また、自分が天下を取りたかったのではないかという説もあります。

天正十年五月二十八日、愛宕山西の坊で連歌の会、光秀が発句で、
時は今、天が下しる五月かな
と詠みます。

いよいよ次号は、本能寺の変にとかかります。ご期待。ポポポン